

## 審査の結果の要旨

氏名 大瀧 玲子

近年、発達障害児・者も含めた家族全体への支援の必要性が認識されるようになりつつあるが、親に比べてきょうだいへの支援はまだ少ない。本研究は、健常児・者との違いが見えにくいことも多い、知的障害を伴わない「軽度」の発達障害児・者に注目し、そのきょうだいの体験の特徴を明らかにし、それを踏まえてきょうだいへの支援の可能性を検討したものである。

本論文は、全5部10章で構成されている。第1部「研究の展望」ではまず、障害児・者のきょうだいに関する先行研究を概観した上で(1章)、鍵概念である「知的障害を伴わない発達障害」を定義し(2章)、本研究の目的を明示した(3章)。第2部では、同胞のもつ障害の特質がきょうだいの体験にどのような影響を与えるのかを調査している。まず研究1は、きょうだい11名への詳細な聞き取りをもとに、軽度の障害をもつ同胞がいる場合にどんな体験が生じるのか、その過程的な構造をまとめたものである(4章)。そこでは、障害の認められにくさの結果としてきょうだいの役割が曖昧となり、適切な距離をとることが困難になることが指摘された。研究2は、重度の障害をもつ同胞がいるきょうだいの体験を聞き取り、研究1の結果と比較したものである。結果として重度の場合と比べ軽度の場合には、同胞像の転換とそのための移行期が存在すること、障害の存在を家族内で共有することが難しいこと、障害認識に対する所属コミュニティの影響が大きいことが明らかとなった(5章・6章)。第3部においては、青年期から成人期のきょうだいの体験の多様性が明らかにされた。研究3では、ひとりの軽度障害の同胞に関しその二人の姉にインタビューを行って、家族内の関係性および担っている役割の違いが、障害者手帳の取得など障害者ラベルと関わる出来事に対する見方にどう関係するかを明らかにした(7章)。また研究4は、5年の間隔をあけた2回のインタビューを比較して、きょうだいのライフステージの変化が同胞の障害の見えにどう影響するかを検討した(8章)。第4部では研究5として、きょうだいとして支援を受けた経験と意識に関し第2部で用いたデータを再分析している。そこで指摘されたのは、特に軽度障害の同胞がいる場合、障害の未診断・未開示の時期にアクセスし、家族の関係性に介入する支援が現在求められている点である(9章)。最後の第5部では、研究全体を総括している。そこでは、家族ライフサイクルの変化に伴って生じるきょうだいの体験特徴の違いが簡潔にまとめられ、臨床心理学の理論と実践に対して示唆されることが議論された(10章)。

本研究は、これまでエピソード的にしか報告されていなかった障害者のきょうだいの体験に対して体系的なデータ収集と分析を行い、軽度障害児・者の体験を説得力ある形で読者に伝えることに成功しているばかりではなく、そこからきょうだいに必要とされる援助の方向性も示して、今後の臨床心理学的実践に重要な貢献をした点で高く評価できる。以上の理由から、博士(教育学)の学位を授与するにふさわしいものと判断された。